

# エクソシスト

映画の中の精神医学

小澤 寛樹

今回は精神疾患の話とい  
うより、魂と身体のことを  
考えさせる映画を紹介しま  
す。

米映画「エクソシスト」  
といえは1974年のウィ  
リアム・フリードキン監督  
による世界的なホラー作品  
で、その後シリーズ化され、  
5年前には4作目の「エク  
ソシスト ヒキニング」も  
公開されました。1作目の  
公開当時、学校から見に行  
かない旨のお達しがなされ  
たほどの衝撃度。怖いもの  
見たさもあって、かえって  
異常に盛り上がり、いわゆ  
るエクソシストブームが日  
本のみならず世界中に巻き  
起こっていたことを思い出  
します。

## 医学教材にふさわしい

### 「エクソシスト」(1974)

ウィリアム・ピーター・  
ブラッティの同名小説が原  
作で、主人公である12歳の  
少女リーガンが悪魔にとり  
つかれ、2人の神父がそれ  
に戦いを挑むというストー  
リーです。母の死に罪悪感  
をもつ若い神父の葛藤(か  
つとつ)や、ドキュメンタ  
リータッチの撮影手法が、  
悪魔払いという神秘的行為  
に説得力を持たせたといわ  
れています。原作小説が49  
年にアメリカで実際に起こ  
った話を題材にしていたこ  
とも、単なるホラー映画以  
上の評価を今も得ているゆ



「エクソシスト デイレクターズカット版」のDVDジャケット  
(ワーナー・ホーム・ビデオから発売中)

えんなのかもしれません。  
さらにこの映画はリアリ  
スティックな描き方によ  
り、医学の教材としてふさ  
わしいものになっていま  
す。  
精神疾患を見立てる上で  
最も重要なのは、ストレス  
や家庭・経済状況を考慮す  
られるのです。

# 心と体の相関関係に着目

このような視点で見ると、映画はリーガンの異常な状態に対して、外因→内因→心因と探りながら話が進み、最後の手段として医師が除霊術を勧める、という展開になっています。  
リーガンの症状では微熱、嘔吐(おうと)に加え、汚い言葉でののしるのはチック症の一種「汚言症」、後ろにブリッジして駆け回る「スパイダーウォーク」は神経症状の「後弓反張」(全身を硬直させ体を反り返らせる症状)、首が180度以上回転するのは「ジストニア」(筋肉の緊張によりけいれんや姿勢がゆがんだりする症状)ともみられ、ある種の脳炎を推定させる症状に合致します。  
その後、リーガンは悪魔払いの記憶を失ったもの自然回復していることから、非ヘルペス性脳炎が考えられます。診断基準に従えば、「脳器質性精神障害」の可能性が高いようです。  
バチカンではエクソシストの学校があるらしく、長崎にも来られた前法王ヨハネパウロ2世もエクソシストを行った記録があるそうです。このエクソシストの学校でも重要なのは、精神疾患や身体の病気をきちんと除外することだそうです。映画でも、若いカラス神父は実は精神科医でもあり、このあたりも実によく考えられた設定といえます。  
医学の歴史を考えると、実は除霊術的要素と身体的要素が分かれたのは、この1世紀ほどのことです。私が医者になりたてのころは、キツネツキなど「霊媒師」から紹介された患者さんがいたことを思い出します。  
「心と体は連携している」という当たり前のことを近代医学は否定してきまし。感染症全盛期の時代にそれまでの医療があまりにも無力で、秘密主義であったことが原因かもしれません。しかし、「スピリチュアルケア」という言葉が取りざたされるように、慢性疾患がまん延する現代では、もう一度心と体の相関関係が脚光を浴びる状況にあるといえます。  
さて、皆さんは心身のすべてを診てくれるエクソシストをお持ちですか。  
(長崎大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学教授)